ウルドゥー児童文学研究

—ナズィール・アフマドとその作品について—

梅 本 麗 子

ナズィール・アフマド Nazīr Aḥmad (1830~1912) が 1869 年に書いた長編小説「花嫁の鏡」Mirā'at-ul-'Urūs は現代ウルドゥー長編小説の歴史の第一歩を告げる作品であると同時に、現代ウルドゥー児童文学における最初の長編小説でもある。この作品を書くようになったきっかけについて作者は次のように語っている。

「子供達にとって読んで面白く、またためになるような本はないかと方々探し回った。だが見つけることができなかった。それなら自分で少し書いてみようと思ひ、アクバリーという名前を付けた女主人公の話を書いた。四～五ページほど書いたら娘達に渡してそれで終わるつもりだった。ところが娘達はその後がどうなるのかしきりに知りたがって、そこで次々と話を重ねアスガリーの話しまで書くことになった。隣近所の奥さん達がこのことを聞いて家にやって来て、写しては持って帰った。」¹⁾

この彼の言葉からも分かるように、最初は自分の娘達用にと書かれたアクバリーとアスガリーの物語は、当時たまたま彼の家の近くに滞在していた州の教育長の目にとまり、「花嫁の鏡」とタイトルをつけられて現代ウルドゥー文学における最初の長編小説となったのである。

最初に娘達に読ませるべく書かれたのは第一部のアクバリーの話しの部分だけであろうと思われ、ページ数にして全体の五分の一弱である²⁾。アクバリーがいかに不出来な嫁であったかが事細かに描かれる。裁縫、料理がまるで不得手で、浪費家で協調性がなく、自由に暮らしたいと言って夫の親と別居し、自分の愚かさのために宝石類をだまし取られ、嫁入りの時に持ってきた衣服は虫に食われ、結局すべてを失ってしまうという粗筋である。ナズィール・アフマドが言うようにこの部分が自分の娘達や近所の少女達に大いに受け入れられたのだとすれば、インドの少女達にとって結婚というものが、非常に現実的な重みを持つものとして受け止められていたと思われる。

第二部で、アスガリーは姉アクバリーとは対照的に、素晴らしい嫁として登場し

てくる。聡明で正直で、コーランをウルドゥー語に翻訳できて書が上手で、裁縫、料理も得意で、町の人すべてが賞賛するほどである。だが作者は彼女の結婚は姉に比べて条件が悪かったと述べている。姉は16歳の時に結婚したが、アスガリーは13歳になっていなかったし、夫もまだ学生であった、というのがその理由である。ここに幼児婚の弊害を説いたナズィール・アフマドの姿勢をうかがうことができる。彼女は非常に優れた人物として全編を通して活躍するが、長年勤めていて家計を思うように動かしていた料理人兼女中頭を追い出してしまうというように、なかなかのやり手という風にも描かれている。彼女の素晴らしさを伝え聞いて母親達が娘の教育を頼みに来る。「花嫁の鏡」が書かれて三年後に書かれた「熊座」Banāt-un-Na'sh³⁾で登場する金持ちの我がまま娘フスン・アーラーも、そのような娘達の一人としてすでにここで顔を見せる。「熊座」の第一章と第二章には「花嫁の鏡」のこの部分がほとんどそっくり用いられており、また「フスン・アーラーをアスガリーがどのようにして教育したかについては、別の本を書くことにしよう⁴⁾」と述べていることから考えて、「熊座」はナズィール・アフマドが自分の教育理念をさらに詳細に述べるために、この部分を導入部分としてふくらませていたものと見ることができる。

小説全体としては、人物の会話が中心となりセリフが並べられているだけの単純な構成をとっており、筋の展開の意外性や小説構成の面白さといったものには欠けるが、会話の中にしばしば表現される登場人物の心理描写には人情を感じさせる面白さもある。義母が、アスガリーが出来の悪いアクバリーの妹だからという理由でまとまっていた息子との結婚話を渋る場面や（アクバリーの夫とアスガリーの夫は兄弟である）、アスガリーの夫が単身赴任で家を離れるのに最初は反対していたが、給料が15ルピーから25ルピーに上がったことで喜ぶ場面などには、ムスリム中流家庭の現実の生活が見えてくるような気がする。また賭け事に無中になる夫をたしなめ、働くのならイギリス人のところの方が給料が良いと夫に忠言するアスガリーの言葉からは、当時のインド社会の状況も推察できる。読者にとってこのような題材は非常に身近に感じられるものであっただろう。

また、多産の末に次々と子供を病気で死なせてしまったアスガリーに、副徴税吏^{タヘスイールズ}であった父親が手紙を書く。この手紙で小説全体が締めくくられるのであるが、この父親はおそらくナズィール・アフマド自身の姿を写したものと言っているだろう。女にとって結婚とは何か、人生とは何かといった、非常に宗教色の濃い内容が書かれてある長い手紙であるが、父親の娘に寄せる愛情が行間から伝わ

ってきて、おそらくこの部分に共鳴する多くの世の親に受け入れられ、何万部も世に出る結果となったのであろう。

「花嫁の鏡」が書かれた1869年、彼は下の娘のために「お話し集」Muntakhab-ul-Hikā-yātを、息子のために「チャンド・パンド」Chand Pand(幾つかの忠告)を書いている。「お話し集」は、子供達に正しいウルドゥー語を教える意図を持って書かれ、彼自身の創作を含め、主としてパンチャ・タントラやインソップ物語から採られた寓話77編から成り立っている⁵⁾。「チャンド・パンド」は短い27章から成り立っている忠告集で、それぞれの章タイトルに関する男児用の忠告がなされている。食べ過ぎるな、眠り過ぎるな、清潔にせよ、といった生活上のアドバイスから始まり、人を妬んではいけない、怒ってはいけないと続く。そして自然現象や地理学など簡単な科学的知識が与えられ、最後の部分で聖者を列挙し、予言者ムハンマドの章で終わる。ナズィール・アフマドの実践的教育理念を伝えているものとして「男子は結婚するまで詩を詠んではいけない。たとえ身内であろうとも女子と共に遊んではいけない」(五章)、「徳の高い立派な家柄の子とつき合うべし」(七章)などというのがある。また二十六章、イエス・キリストについて書かれている部分では「我々ムスリムとイギリス人の宗教はもちろん異なっているが、我々とヒンドゥー教徒ほどの違いはない。我々はヒンドゥー教徒の中に住んでいるので彼らと交際し、同じような生活習慣を持っているのである。当然イギリス人も良くつき合わなければならない。そうすることが我々の利益につながるのである。」⁶⁾という一文が見える。ナズィール・アフマドがイギリス人の優位性を見てとり、彼らと共存することでインド社会の進歩があり得ると考えていた姿勢がよくうかがわれる。

1873年には「花嫁の鏡」の続編として「熊座」が書かれている。前述したように、すでに「花嫁の鏡」の執筆中に内容と構成が計画されていたと思われるもので、54章の短い章の積み重ねの中に、我がままで手に負えない娘フスン・アーラーが、アスガリーとアスガリーの義理の妹マフムダの教育によって立派な女性に成長していく過程が描かれている。ナズィール・アフマドの教育理念を女子用に書いたものであり、「花嫁の鏡」と同じく主として会話が並べられて状況が進んでいくという構成である。各章でストーリーの展開とは無関係の人物が登場し、自分の経験を語ることもある。自然現象や地理などの科学的知識は「チャンド・パンド」よりは多量に、詳細に記述されている。教育を受けなかった女性がいかに悲惨な状況に置かれていたかを訴え、女性の幸せにとって教育が重要で

あることが繰り返して述べられている。ここで書かれたナズィール・アフマドの根本的な教育理念は「花嫁の鏡」の延長線上にあると言えるだろう。

彼の一連の児童文学作品は、前述したように子女教育に寄与したものであると同時に、ウルドゥー語教育にとっても貴重な貢献をしたとみなされているものである。当時マスジッドに併設されていた学校では、アラビア語、ペルシヤ語の教科書が用いられており、伝統的な教育の場ではウルドゥー語は補助的な役割しか担っていなかった。解説文を読んだり、アラビア語、ペルシヤ語の単語の意味を理解するためにだけしか使用されていなかったのである。ナズィール・アフマドは自分の作品の中で、ウルドゥー語を学ぶようにと繰り返して子供達に呼びかけている。「お話し集」は「90年を経た今日でも、美しいウルドゥー語を学ぶために、ナズィール・アフマドの『お話し集』読まなければならない⁷⁾と高く評価されているものである。

ナズィール・アフマドは非常に厳格な宗教的雰囲気の中で育ったという経歴を持つだけに、彼の作品すべてには教訓や説教話しが多量に含まれている。結果的な教育性を表面に押し出している彼の作品は、現在の世界の児童文学の傾向から見るとすでに古い時代のものであると言える。しかし、最初のウルドゥー長編小説が子供のために書かれ、子供にも与えるべき文学があることを結果的に社会に知らしめた彼の貢献は、やはり大きなものであったと言えるだろう。ナズィール・アフマドと同時期に児童書の編集に携わり、多くの児童向け読本を書いた人物にムハンマド・フサイン・アーザード Muḥammad Ḥusain Āzād (1830～1910) がいる。彼らの影響を受けて、以後続々と類似の作品が生み出されていった。「第二次大戦後、より実践的で機能的な児童文学が登場して来るまでの間、彼らの影響は数十年もの間持続していた。児童文学界の19世紀後半は輝かしい時代であった。」⁸⁾と評価されているのである。

-
- 1) Ibne Inshā, *Literature for Children in Urdu*, Karachi, 1967, pp. 7～8.
 - 2) Nazīr Aḥmad, *Mir'at-ul-'Urūs*, Lahore, pp. 25～61.
 - 3) Nazīr Aḥmad, *Banāt-un-Na'sh*, Lahore, 1965.
 - 4) Nazīr Aḥmad, *Mir'at-ul-'Urūs*, Lahore, pp. 135～136.
 - 5) Nazīr Aḥmad, *Muntakhab-ul-Hikāyat*, Lahore.
 - 6) Nazīr Aḥmad, *Chand Pand*, Dehli, 1929. p. 77.
 - 7) Nazīr Aḥmad, *Muntakhab-ul-Hikāyat*, Lahore, p. 15.
 - 8) Ibne Inshā, *Literature for Children in Urdu*, Karachi, 1967, p. 12.

(東京外国語大学大学院修了)